

分科会報告：小中学校の部

田島久士

小中学校の部では、私立小学校における姉妹校との国際文化交流、公立小学校における多言語活動、中高連携による地域に根ざした国際理解教育についての事例が紹介された。以下にそれぞれの発表の骨子と質疑応答を報告する。

1. 「スペインの姉妹校との交流に向けて

－私立学校独自の国際文化交流を目指した実践の報告－

発表者：茂木俊浩氏（光塩女子学院初等科）

まず、学校の紹介、外国語教育の様子について説明された後、スペインの姉妹校との交流を始められた理由について話された。2014年に、光塩女子学院の設立母体であるスペインのメルセス宣教修道女会が経営する姉妹校ベラクルス校を自費で訪れた（発表者は前年からスペイン語を学んできている）。そこで校長にも会い、またメルセス会の総長の援助も得て、ステップを踏みながら姉妹校間交流のプロジェクトが開始した。

翌2015年、最初は職員間の交流から始め、一人でも多く巻き込むことを目標とした。メールなどによって、カリキュラムなどお互いの現状を知り合うことができた。そして、12月からは光塩の4年生80名とベラクルス校の3、4年生計106名による子ども同士の英語を使った交流が始まった（初等科では創立当初より現在も全学年が週に2時間、ネイティブと日本人の2名によるT.Tで英語の授業を展開している）。創立記念日、ハローウィン、クリスマス、バレンタインなど年5回計画した。例えば、メッセージカードの交換を行っている。現在は「多対多の交流」だが、将来は「1対1の交流」を目指している。

さらに、6年生の児童数名にスペインについてやスペイン語を教え（3年生から5年生には希望者を対象に週1回位でメルセス会の日本人シスターがスペイン語教室を開講）、スペイン大使館を訪問するなど意欲的に活動されている。アンケートでも「同じスモックを着ていて姉妹校だと分かった」「私に送ってくれた子の名前を読みたい」「私たちのこともっと知ってもらいたい」と、もっとスペイン人と交流してみたいと積極的な姿勢を示す児童が多いことが再確認されたとのことであった。

今後は（時差の問題があるが）リアルタイムでの交流や日本でできる文化体験、お互いの文化についての質問、交換留学など「より深い」交流への意欲を語られて、締めく

くられた。

質疑として、周りの教員をどう巻き込むか、交換留学の際の危機管理の準備について、様々な費用の捻出、初等科で終わらせずに中等科にどうつなげていくのかなどがあった。

2. 『外国語活動』の立て直しとともに推進する小学校の多言語活動

発表者：渡辺香代子氏（埼玉県杉戸町立西小学校）

小学校では、5年前に「英語活動」から「外国語活動」に変わったことは「言語的視野を広げたと見るのが妥当だろう」ということが発表者の見解である。そこで、「外国語活動」を国語教育と関連づけ、連携させて推進していくことが必要である。多言語活動へとつながる質の高いものにするためにどのように行うのか、以下のように提案された。

- (1) 'Hi, friends'を利用して、独自の教材を作成している。具体的には「自己紹介」が（たとえ、拙くても）できるようにしたいと考えている。
- (2) 小学校の現状と課題は「外国語活動」が軌道に乗り切っていないことである。ゲームのみがゴールとなり、目的化している。本当のゴールは不透明である。また、ALT任せとなってしまっている。
- (3) 学級担任の立場を活用して、多言語活動の推進を図るべきである。全面に出すことは難しいが、「英語への特化」を「より広い入口」にして取り組んで実施していくことができないだろうか。

そこで、以下の課題と実践を述べられた（詳細は紙幅の関係で省略）。

- ①学習指導要領の目標にある「言語や文化に関する気付き」という「ことば」の視点が不足している。「語順」「アルファベット」などを通して言語の働き、仕組みへの視点の育成を図る。国語教育との関連、連携を図り、母語である日本語の国語力の強化を図る。
- ②専門教員の育成と養成。小学校学級担任の立場から専門性を高める。
- ③動物の鳴き声(多言語)の実践。
- ④フランス語の歌(似ている言葉)の実践。

最後に、英語に親しむことができたなら他の言語へといくことができる。日本語も含めて、

言語の「普遍性」や「個別性」にまで視点が落とされた言語活動の展開が可能となる。児童へのアンケートでも気付きが表れている。これは、児童に「言語はどの言語も平等、対等である」という言語意識と個別の言語における理解を促すものとなるとの考えを述べられた。

質疑としては、国語科の授業での取り組み、ことばの語順や文字指導、ことばに興味をどのようにして持っていくのか、専科教員とはどのような人なのかなどがあつた。

3. 「2020 オリンピックに向けた渋谷区の中高連携事業

ー地域に根ざした新たな国際理解教育の構築ー

発表者：白倉昌裕氏(渋谷区立原宿外苑中学校)、黒澤眞爾氏(関東国際高等学校)

公立校と私立校との「コラボレーション」を目標にして進めてきた。公立と私立の「縦割り」を越えて、子どもたちのために何ができるか、一緒にできることは何か、教育資源の活用を踏まえて、以下の点について発表された。

- (1) 渋谷区の「国際理解教育」(2020 オリンピック実施決定以前からの取り組み)
 - ・ 小中学校全校での実施、英語教育重点校(小 1: 20 時間の外国語活動、ALT の常駐など)
 - ・ 海外派遣の実施(例えば、フィンランド現地校で授業を受ける、プレゼンをさせる)
 - ・ インターネット上でのメールによるコミュニケーション(課題を発見させ、発信させる)
- (2) 関東国際高等学校との取り組み(英語を使う機会を増やす)
 - ・ 英語キャンプ(5 回、2 泊 3 日、例えば、松涛中学校)
 - ・ いきなり、ネイティブスピーカーと話す
- (3) ベトナム人学校(毎月土曜日、於: 関東国際高等学校)
 - ・ 中学生を招待
 - ・ テト「祭り」での交流
- (4) 地域内での教育連携
 - ・ 人的(教員、生徒、保護者、住民)
 - ・ 物(モノ)的(各学校での校舎、施設)
 - ・ 祭りでの文化紹介
- (5) バンコク日本人学校での実践(両発表者の出会い)

- ・ シンガポールへの修学旅行
- ・ タイの大学との連携(タイ語の授業を受ける)
- ・ インターナショナルスクールでの体験授業

そのほか、帰国子女の問題点やタイ教員訪問団との交流にも触れられた。また、今後については、渋谷区は新国立競技場のおひざもとで、大使館も多いので、文化紹介を行う地域との活動、(ガイドボランティアとしての)小中高の連携についても述べられた。

なお、フロアーから「自分が思っていることを言うだけ、議論ができるような母語の力を育てるのに学校種、教育機関の枠を取り外すことは大切」とのコメントをいただいた。

(大田区立糀谷中学校)